

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成29年 9月20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学部・フィールド科学教育研究センター

職 名・学 年 研究員

氏 名 渡 部 俊 太 郎

助成の種類	平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	国際植物学会議	
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発表題目	Asymmetrical mating pattern and reproductive success of heterodichogamous tree <i>Machilus thunbergii</i> .	
開催場所	深センコンベンションセンター(中国・深セン)	
渡航期間	平成29年7月22日 ～ 平成29年8月5日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000 円
	使用した助成金額	150,000 円
	返納すべき助成金額	円
	助成金の使途内訳	交通費:50410円
		現地滞在費・宿泊費:63,149円
学会参加費:37,907円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は私のような不安定な身分の者にまで助成をしていただきまことに感謝いたします。本財団の助成に申請した際、私は自分自身の研究資金を持っていなかったため、本財団の助成がなければ今回の発表は叶いませんでした。本財団の厚意に深く感謝いたします。	

成 果 の 概 要

京都大学フィールド科学教育研究センター

研究員 渡部俊太郎

<学会の概要>

国際植物学会議 (International botanical congress) は 植物科学の分野における世界最大の学術団体である。6年に一度大会を行っており、今年是中国の深センにおいて大会が開かれた。深センは近年急速に発展を遂げている地域であり、町の様々な場所に学会関連のポスターや広告が見られ現地の興奮の大きさを肌で感じた。大会は大会期間を通じて 110 カ国から 7300 人が参加しており、大きな盛り上がりを見せていた。発表内容は植物に関連する科学を幅広く扱っており、分子生物学、生理、系統、分類、生態、進化まで様々な分野の研究発表を聞くことができた。大会は 45 の基調講演およびキーノートレクチャーと 220 のセッション、そしてポスターセッションから構成されていた。これらの発表の合間に休憩時間が設けられ、コーヒーやお菓子が無料で提供され、その時間をつかって研究者間の交流を広げる良い機会となっていた。

<参加・発表成果>

私は今大会において「Asymmetrical mating pattern and reproductive success of *Machilus thunbergii*」というタイトルでポスター発表をおこなった。この発表では日本の代表的な常緑樹であるタブノキの花に午前中に♀になり午後に♂になる株と、その逆に午前中に♂になり午後に♀になる株の2タイプが集団の中に存在することを報告するとともに集団における株の比率の偏りが非対称な繁殖成功を引き起こすことを報告した。発表に対しては、中国、アメリカ、イタリア、メキシコ、台湾など様々な国の人が関心を示してくださり、特に類似の現象が精力的に研究されてきた中国とアメリカの研究者から様々な助言をいただくことができた。どの方も私の拙い発表に対して非常に親切にコメントをしてくださり、特に今後研究を進展させるためにどのような調査や実験が必要なのかについてのコメントをいただけたことは大変ありがたかった。いただいた助言の数々は現在執筆中の論文の内容を向上させる上で大変役立っている。また、その機会に昨年国際誌に発表した論文の別刷りを渡すことも出来、交流を広げることができた。

発表以外では、私自身の研究テーマと関連する進化・生態分野のセッションに多く参加した。これまで教科書や論文を通じて名前を知っていた研究者の発表を直接聞き、最新の研究成果に触れることで多くの刺激を受けることができた。特に植物の自家受粉率の地理変異を、これまで提唱されてきた「繁殖保証仮説」ではなく分布拡大の際に生ずる遺伝的浮動の大小によって説明しようとするバージニア大学のグループの発表は大変面白く、刺激的であった。その後の時間をみつけて発表者に質問させていただくことができ多くのことを教えていただいた。また、私は現在樹木の葉フェノロジーをシミュレーションによって予測するプロジェクトに雇用していただいております、樹木の葉フェノロジーを調べた研究についてもいくつかの発表を聞き、現

在のプロジェクトにも役立てることができる情報も得ることができた。特に植物園での植え替え実験の結果を報告していたドイツのグループの研究は、私たちのシミュレーションの予測とも整合的な結果であり、大変興奮した。

学会の本大会のほかに現地の森林の見学にも参加した。現地の研究者から丁寧な説明をしていただき非常に勉強になったほか、日本と共通して分布している植物種もあり、刺激的な時間であった。また、学会の本大会とことなり少人数での見学会であったことから外国の研究者ともより長い時間、話をすることができ、お互いの国の植物や風土について話をする大変良い経験になった。

私自身は、初めての国際会議参加となったが、多くの国の人と議論し、自分自身の研究を改めて見つめなおす良い機会となった。特に、現在世界各地で行われている研究の成果を目の当たりにして、自分がこれから何をしていくべきなのか、どういった問いに向き合うべきなのかを考える素晴らしい時間であった。今回の学会で得た刺激を日本での研究活動に生かし、また機会があればこの学会に参加したいと感じた。